



アユは、なぜ海に出て、また川に上ってくるの

アユの先祖は、北の海にいた

川で生まれたアユの子魚は、冬を海で過ごし、春に川へ上ってきます。なぜ、川に上ってくるのか、まだ、はっきりとはわかっていません。魚の進化の歴史から考えて、こうではないかといわれている説があります。次のような説明です。

アユは、シシャモやワカサギに近い仲間です。これらの魚の先祖は、1000万年前から、太平洋の北の方にすみ、卵を産むときには、河口や岸近くにやってくる生活をしていました。そして、何回かあった寒い氷河期には、暖かい南の海に下り、気候が暖かく変われば、また北にもどる生活をしていました。

川でくらす変わりものが現れた

そのうち、アジア大陸に、産卵のときだけではなく、子魚のころから、川に入り、川底の石などについた「も」を食べる、今のアユが現れてきました。

川や湖などで、いちばん数が多いのは、コイの仲間です。コイの仲間は、水草を食べたり、川底や水面近くの小さい虫を食べたりしていますが、口には歯がありません。のどに歯の役目をするものがある魚です。石などについた「も」を食べることはできません。

アユは、コイの仲間が食べることができないため残っている、「も」をけずりとして食べられる、くしのような歯をもつようになって、川でくらすようになったというのです。

アユは、川で卵からかえると、すぐ海に出ます。そして、プランクトンなどを食べて5～8センチメートルくらいまで成長すると、川を上ってきて、石の多い中流付近でくらしします。（監修・安部 義孝）

